

## 2002年夏 イングランド紀行

— Maldon と Sutton Hoo を訪ねて —

荻 部 恒 徳

7月29日。今日も朝から暑いが快晴。いよいよ待望の Essex (= East Saxons の訛ったもの) 州にある The Battle of Maldon の古戦場を訪れる日がきた。数十年來の願望が達せられる私にとっては記念すべき日である。この戦いは古英語詩に歌われ、Anglo-Saxon Chronicle にも991年の項に史実として記録されている、イギリス軍が Vikings に敗れた合戦である。同行の高橋さんの運転する車で London から高速道路のA12で行くのだが、その入口がなかなか分からない。Hampstead に出たため東寄りに移動しながら、ようやくA12に乗れた。Danbury から local の414号線に入り Maldon (語源は 'hill with monument or cross') の町に着く。Tourist Information を探しても見つからず、High Street を行ったり来たりしていると突然、坂道の下に The Blackwater River の雄大な panorama が開けたではないか。感動の一瞬であった。川岸には大型帆船が数隻停留し、pub も2軒あり resort の観がある。対岸には Heybridge Basin の川原が広がっている。川岸の遊歩道で、坂上の St Mary Church をスケッチしていた初老の男性に古戦場の方角を尋ねる。この遊歩道を川下に向かって先端まで行けばよいとの返事だった。resort 客の行き交う遊歩道を進むと、なんと子供プールが出現した。さらに進むと car park があり、歩道は途切れて工場の敷地になってしまい、川沿いを歩けない。残念だが仕方がない。

町に戻って、古英語詩 *The Battle of Maldon* の hero, Essex (かつての七王国のひとつ) の州長官でこの合戦の武将、Bryhtnoth [brýçtno:θ] (語源は 'bright courage' 「勇猛の士」で、名は体を表す) の石像があるという All

Saints Church と、町に着いたとき見つからなかった Tourist Information をまた探すことにした。今度は両方ともすぐ見つかり、石像はこの教会の入口右手の外壁にはめ込まれていた。Information はとても親切な対応で、car park の奥から工場の柵の外を回ると古戦場に通ずる川沿いの小道があると教えてくれた。これで古戦場まで行けるではないか。高橋さんの車を行楽客のかなりが帰ってしまった car park に留め、川沿いの小道をたどる。対岸の Heybridge Basin の島のような川原が切れ、川幅が広がる。岸と川の流れの間には雑草の生えた、尾瀬ヶ原の浮島のようなものが無数にあり、湿地帯 (marsh) をなしている。川上の Maldon の方向を振りかえるとヨットハーバーが遠望できる。行く手の川下の方を見ると樹木で覆われた中島の Northey Island が見えた。Northey の語源は「北島」で、発音は [nó:ði:] である。この島こそ Essex 軍と対峙した Vikings 軍がキャンプを張っていたところである。小道を進むと祖父と父親と娘の家族連れとすれ違った。祖父にどこまで行って来たかと尋ねると、二つ目の turnstile (牧場の回転扉) までと言う。しかし先を見ると小道が左折して水辺まで延びているのが見える。川水の色がそこから対岸にかけて線を引いたように、上流がうす茶色で下流が青みがかって潮目ができている。モーターボートも1隻係留してある。男性が一人立って向かいの Northey Island の方を見ている。小道が左折すると車が通れる、幅4メートルくらいの砂利を敷いた道に出た。この道が島につながる causeway だ。

午後4時ころだったが北海につながっているため次第に満潮になるころで、causeway は岸から水中に没していた。岸辺に立っていた男性は近くに住む人で、毎日のようにここに来て泳いだり野鳥を眺めたりしているとのこと。一日に2回ある干潮時にはこの causeway を Land Rover で300メートルほど先にある対岸の Northey Island まで渡れるとの話だった。またこの人の話ではこの島は今では bird sanctuary に指定され、島内には National Trust の管理事務所があるとかで、前もって連絡をしておけばボートで渡してくれる

そうである。高橋さんが川水をなめてみたところ海水と同じくらい塩辛いとのこと、私もなめてみたがほぼ海水と同じである。The Blackwater River（当時は Panta 川と呼んだ）もこの辺は海から15キロも遡っているが、上げ潮なので特に海水に近いのであろう。足元をよく見れば岸边には海草も流れついている。男の人はモーター・スクーターで帰って行ったが、声を掛けて道を指差してくれた。さっきまで乾いていた道が部分的に水をかぶり始めたではないか。我々も急いで引き返すことにした。岸边の marsh も水をかぶり、浮島の間の水かさも増してきた。Vikings の軍を渡河させ、こちらの岸边で決戦をしたはずの辺りは今では柵の巡された牧場になっている。

今日の Maldon の描写はこれくらいにして、Anglo-Saxon Chronicle と古英語詩 *The Battle of Maldon* に記述されている、991年に実際あった Anglo-Saxons と Vikings との戦いに移ろう。北海からこの Blackwater 川を船で遡行してきた Vikings の軍勢はこの島にキャンプを張って、対岸の本土上陸を目指していたのだ。これを迎え撃つべくこちら岸には、Essex 州の長官 (Ealdorman) Bryhtnoth が率いるイギリス軍が対峙していた。Bryhtnoth が戦闘隊形を整え、部下たちも敵を撃つ心構えをしたところへ、詩人によると、相手の伝令が水際までやってきて、戦で犠牲者を出すよりは黄金で貢を払えば、戦わずして引き上げてやる、と大声で告げる。これに対し、怒った Bryhtnoth は盾を持ち上げ、槍を打ち振るい、剣を突き出し、こちらは祖国を守るために異教徒には一歩も引かぬと言え、と応える。伝令と Bryhtnoth のこのような直接話法によるやり取りはこの詩を大変 dramatic な臨場感あふれるものにしてしている。イギリス軍の大將は進めの合図をするが、ちょうど干潮から満潮に変わり始めたときで、増水で進軍を阻まれる。引き潮になるや Vikings も渡河を始める。イギリス軍の Wulfstan は仲間と causeway に立ちほだかり敵を一人射て致命傷を負わず。causeway の守りが堅いと見て取った Vikings は、そちらで戦うから渡河させてくれ、と言葉巧みに要求する。剛毅な Bryhtnoth は道は開けてやり、すぐこちらに来て戦え、と応答する。敵は一斉

に渡河してくる。イギリス軍は守備態勢を固める。戦を前にして緊迫感が走る。詩人は言う。死すべき運命の側が亡び、空にはカラスが飛び回り、鷲が死肉を求め、地上には喧騒が鳴り渡ったと。槍と矢が飛び交い、双方に死者が出る。Bryhtnoth の甥が斃れた。味方の Eadweard がその仕返しをした。

戦いは続く。Vikings の一人が Bryhtnoth を狙って槍を投げつけ、大将は傷を負うも、仕返しに最初の槍で相手の首を貫き、2本目の槍で相手の心臓を突き刺す。彼は神に感謝する。また Vikings の一人が Bryhtnoth の高価な鎧と指輪と剣を奪おうと襲ってくる。大将は剣の鞘をはらって応戦するも、腕を切られ、黄金の柄の剣が地上に落ちる。それでも白髪の Bryhtnoth は部下に熱弁を振るい、勇気を持って戦い続けるよう励めますが、自らは地面に倒れる。天を仰いで、神にこの世で受けた喜びを感謝する。

大将を失ったイギリス軍に逃亡者が出る。Godric は主君の馬に乗り、兄弟の Godwine, Godwig と共に森に逃げ、裏切り者の汚名を残す。むろん恐れずに戦い続けた者が多い。若武者 Ælfwine は宴会の席で立てた戦の誓いを思い出そう。今こそ勇気が試されるときだ。わが家柄の名折れにならぬよう、大将亡き今こそ敵前逃亡の恥をかくまいぞ、と声明する。しかし彼が前進し仕返しを試みたとき倒される。彼は仲間に前進を請う。これを受けて Offa が主君亡き今、互いに励まし合うことこそ我らの務め、と応じる。このように生き残った武士たち Leofsunu, Dunner, Æscferth, Ætheric, Oswald, Eadwold は一步も退かず、主君亡き後の帰宅の恥をさらさず、主君の仇を討つ、と次々と誓って戦い続ける。

現存するこの詩の最後で、老武士 Bryhtwold はこの詩の主題である英雄精神 (heroism) を高らかに述べ、武士たちを鼓舞する。

'Hige sceal be heardra, heorte þe cenre,  
mod sceal þe mare, þe ure mægen lytlað.  
Her lið ealdor eall forhearwen,

god on greote. A mæg gnorian  
 se ðe nu fram þis wigplegan wendan þenceð.  
 Ic eom frod feores. Fram ic ne wille,  
 Ac ic me be healfe minum hlaforde,  
 Be swa leofan men licgan þence.'

(*The Battle of Maldon*, ll. 312-19)

「心はいっそう強く、 気力は一段と充実し、  
 勇気はさらに大なるもの、 我らの体力が小なるにつれ。  
 大将はここに 剣で切り倒されておられる、  
 高貴なお方が砂の上に。 永久に悔やむことになろう、  
 この戦場から 逃亡しようと思うも者は。  
 わしは年老いた。 ここより逃れることは欲せず、  
 わが主君の 傍らに  
 かくもいとしきお方のお側に 横たわりたいと思う。」

この古武士 Bryhtwold の言葉は、古英語詩中、武士たる者の勇気の大切さを格言的に述べ、逃亡を戒め、最後まで戦って討ち死にしたいと、斃れた主君に対する心情を吐露して余りある最高の名文句である。私が英語発達史の教科書として使ったことのある Charles Barber の *The Story of English*, 33頁にも OE の見本としてここが引かれていたのを覚えておられる方も多いただろう。逃亡した Godric とは同名異人の勇敢な Godric が先頭に立ち、槍を投げ、剣を打ち戦場に斃れるところで、この325行の詩は終わる。

この詩は死者たちの御霊に対する鎮魂歌なのである。学者たちはこの詩を早いころの戦争ルポルタージュ文学の傑作とみなしている。私もそう思っていた。鎮魂歌であることを私はこの地を訪れてはじめて意識した。彼らはみな安らかにこの草原に眠っている。千余年の時間を経た今も、武士たちは昔のまま岸辺

に寄せる小さな波音をのどかに聞いているようだ。向こう島の Northey は今は小鳥たちの sanctuary だ。Vikings ならぬ小鳥たちがこちらに飛来することもあるだろう。小鳥たちよ彼らを慰めてやってくれ。夏草や兵（つわもの）どもの夢の跡（芭蕉）。

7月30日。昨日の Essex 州の Maldon 訪問に続いて、今日はその北隣りの州である Suffolk（語源は south + folk「南部民」）にあり、やはり北海に流れ出る Deben [dí:ben] 川のほとりの古墳群がある Sutton Hoo [sʌtn hu:] を、これまた、いよいよ訪ねる日である。Sutton Hoo といっても大方の日本人にはなじみがないと思うが、England における20世紀最大の考古学的発掘が行われた地名で、1938-9年に王の舟墓が発見されて一躍脚光を浴びたところである。この地名の語源は Sutton は OE sūþ-tūn (= south-town, village) 「南村」、hoo は OE hāh 'spur of hill' 「丘の上」で、方位と地形を表したものであろう。この王の船墓は古墳群中最大・最高のもので、かつてこの地を支配していた Anglo-Saxon 時代の7王国 (Heptarchy) の一つである East Anglia 王国の、625年ころ亡くなった Rædwald 王の墓ではないかと思われる。そうであるならこの船墓はその直後の造営ということになる。なぜか埋葬者の遺体はなかったが、その副葬品の高い価値から王者の墓と断定され、一般に Sutton Hoo Ship Burial と呼ばれるようになった。

しかしこの船墓の発掘は考古学的な大発見であるのみならず、間接的ながら文学との関連もクローズアップされた。古英語叙事詩 *Beowulf* 冒頭の Scyld 王の船葬（この場合は埋葬されるのではなく大海原に流されるという違いはあるが）の描写の具体例であり、この叙事詩で活躍する武士たちの武具武器やハーブや角杯などの描写と出土品のそれらとが類似しているために、*Beowulf* という英雄物語詩に俄然具体性と真実性の光が投げかけられ、文学者の関心を強く引いたのであった。誤解なきよう繰り返すが、Sutton Hoo Ship Burial と叙事詩 *Beowulf* との関係は直接的なものではない。*Beowulf* は北欧が舞

台であり Scyld は Denmark 王である。しかしこの考古学的発掘品の数々は *Beowulf* という文学作品にいわば外的・内的真実を与えてくれるのである。Anglo-Saxon 人の *Beowulf* の作者が Sutton Hoo の船墓の副葬品から想像される王の生活と極めて類似した世界を描いていたことが証明されたのだった。

今朝は早いと思ったが待ちきれずに8時半に昨夜泊まった Woodbridge の町の The Bull ホテルを出た。数キロしか離れていないので9時頃には着いた。やはり門はまだ閉まっていた。周囲は畑と林である。門の左手奥には新しい建物も見えた。開門は10時である。まだ1時間もある。門に通じる農道の角にポプラの立木があって日陰を作っている。このところ連日の猛暑で日中の気温は30数度になったのだが、この木陰は風があって涼しい。そこを選んで駐車した車のなかで昨日の Maldon 訪問の日記を付ける。高橋さんはあたりを散策し、農地を囲む鉄線の柵に不法侵入を防ぐため電流を通してあるので危険だという warning が出ているのを見つけたりした。

実はイングランドに来る直前に日本でインターネットで検索したら Sutton Hoo が出てきて、今は National Trust に買い上げられ、遺物とそのレプリカが陳列展示された資料館と受付・売店・食堂の棟とからなる visitor centre の建物が出来、1日2回の guided tour があるのを知って驚いたのであった。これまで私は Sutton Hoo の墳墓は整備されずに荒涼とした原っぱになっていて、最寄の町や駅からタクシーで行った場合、もし運転手に多少の知識があれば案内はしてもらえるかもしれないが、そうでなければ一人さびしく墳墓地で経を唱えるごとく、*Beowulf* のよく知られた一節である Last Survivor を読もうかと思っていた。私の半行対訳版からその原文を省略し、拙い日本語訳のみを次に掲げる。

「汝、大地よ、もはや人々が守れぬ以上、  
貴族の財産を守ってくれ！ 見よ、それを昔汝から  
勇士らが得たのだ； だが、戦死が奪ったのだ、

恐ろしい致命的な悲しみが、　　すべての者を  
我が一族の；　　彼らはこの世を諦め、  
広間の喜びを見取めた。　　わしにはいない、剣を帯びる者が、  
或いは磨く者が、　　飾りのある酒杯を、  
高価な杯を；　　武士団はいずこかに立ち去った。  
金で飾られた　　丈夫な兜も  
金箔が剥がれる定め；　　磨き手たちが眠っている、  
戦の面頬を　　磨くはずだった者たちが；  
それに鎖帷子も　　戦で受けたのだったが、  
盾のぶつかり合いで　　剣の切っ先を、  
主の亡きあと朽ちていく。　　鎧の鎖も  
武将について　　遠くに行くことはできない、  
武士たちと並んで。　　豎琴の歓びもない。  
歓びの木の楽しみも；　　立派な鷹が  
広間を飛び抜けることもなく、　　駿馬が  
城の広場を踏みつけることもない。　　不吉な死が  
多くの人間を　　送り出してしまったのだ！

(*Beowulf*, ll. 2247-66)

人の考えることは同じらしく、visitor centre 出入り口の脇のところの立て看板にこの一節の現代英語訳が出ているではないか。墳墓の王の死と物語の一族の滅亡は必ずしも同じではないのだが、輝いていたはずの出土品も今は1300年以上も経ち、多くは朽ち果てており、ubi sunt 「今いずこ」の悲哀感は共通している。ところが実際の Sutton Hoo は予想のそれとは大きく違っていた。1998年に前述のように National Trust に買い取られ整備されて、今年の春から一般公開されたのだった。そう言えば最近では史跡や出土地が整備され観光に供せられるというのは、日本でもどこでも同じなのだ。こうした史跡の一

般公開は悪いことではないが俗化であることも間違いない。

開門と同時に3.5ポンドの入場料を払って通る。大きな資料館とやや小ぶりの受付・売店・食堂の建物が向かい合って建てられている。建物はいずれも Anglo-Saxon 風に単純な切妻屋根の、出入り口は一つの木造（日本の伝統的な建物もそうだ）である。資料館の出入り口高く切妻の下に出土品の中でも有名な兜（helmet）を錆色にした大きなレプリカが飾られ、我々を見下ろしている。作品 *Beowulf* のなかでデンマーク王 Hrothgar が建てた Heorot（雄鹿の館）の切妻の下に英雄 Beowulf が怪物 Grendel からもぎ取った片腕が戦利品として飾られたのと同じ趣向である。資料館の中身は充実していた。というのは一昨日ロンドンにいるときに高橋さんに予備知識を持ってもらおうと British Museum の Sutton Hoo 関係の第41展示室（部屋は変わっても昔から展示はあるのだが、日本人の間では関係者にしか知られていなかったのは残念だ）に案内したのに、もぬけのから同然で、剣・鍋・皿・スプーン・外国のコインといった一部の出土品が残っているのみで、あとは貸出し中のお詫びの紙が貼ってあって落胆したのだが、大部分はここに来ていたのだった。しかし副葬品の中でも最も美術品としての価値が高い金属製の七宝焼きのガマ口の蓋はここにもなかった。展示品は王の船墓からのもの以外に他の墓からの出土品も加えられている。30年ほど前に British Museum で見た品々をあらためて見て回る。展示で工夫したなどと思われるのは船体中央部に設けられていた、棺桶を中心に副葬品のレプリカを配置した遺体の間（ま）を再現したものであった。これと同様に一般の入場者向けに Anglo-Saxon 社会の生活をドラマ化した10分ほどの映画も上映されていたが、こちらは見るべきものはなかった。今回の旅の目的は展示品を見ることより、実際に墳墓地を自分の目で確認することだった。それが2時間後にはガイド付きで実現すると思うといささか興奮を覚える。

受付・売店・食堂棟の外には船墓の船（実物は約27メートル）の2分の1の模型が飾られている。北欧の博物館にある後代の Viking ship より簡素な造

りで、よく見る龍の頭をかたどった船首や作品 *Beowulf* でも船の形容として出て来る *hringed-stefna* (= *ringed-prow*), *wunden-stefna* (= *wound prow*) 「環型(わがた)の船首」を持っていない。ついでに墓の船に触れておくと、1939年に発掘されたときその鋳や板は炭化せずに朽ち果て、それらの跡 (*impression*) だけをくっきり留めていたことが当時の写真から分かる。受けからもらった地図で墳墓地(ここにはフェンスが巡らされており、*guided tour* の参加者以外は入れない)の周り と *River Deben* 河畔に至る *walking course* が設けられている。脚の痛む私は *walking* はせず、*walking* に行った老若男女が元気よく戻ってくる姿を日陰で眺めて、イギリス人とは歩くことが好きな人種だなあと感心してしまった。*Sutton Hoo* に来た人たちの3分の1か4分の1位の人しか *guided tour* に参加しない。つまり墳墓に興味があるからというより、天気の良い夏休みの1日を健全な *recreation* で過ごすためにやってきた人たちの方が多いのだ。しかし私も墳墓地の周りとはともかく、*River Deben* のほとりに行って見るべきだったと後悔している。

午後1時よいよ *guided tour* がはじまる。参加者は3ポンドで赤いシールをもらっており胸に付ける。*visitor centre* の裏から歩き出して林に入りすぐ切れたところの右手にかなり大きな四角いどっしりした3階建ての田舎の邸宅が見える。これが墳墓地の元の所有者である *Mrs Pretty* (退役大尉の未亡人) の住居である。彼女の家と私たちの立っている小道が、川から緩やかにせり上がってきた斜面の頂点にある。ここからは高い木がないので2,300メートルほど先に *River Deben* の川面が見える。その向こうが *Woodbridge* の町だ。ガイドは初老の品の良い婦人だが、後で行く船墓のところからは今は19世紀の植林で木がうっそうと茂って川が見えないのでここで見ておいてくれと言う。言うまでもなく墓として用いられた船はこの川から引き上げられたものだからだ。しばらく行くと視界が開け、左手前方(川は右手)に原とその向こうに緑の野菜畑が広がる。この原が墳墓地で、120m×400mくらいの広さがあり、周りが柵で囲まれており扉を開けて入る。入ってすぐ右手前方に最近発掘して

埋め戻し元の高さに復元した12号塚がこんもりと盛り上がっている。あとの塚はやや盛り上がっている程度という感じである。我々の船墓が1号塚で右手奥に近いところにあり、船があったところにロープが地面に張ってある。船の遺物の上を覆った蓋を開けて見せるわけでもないので、大体本で得られる知識を語るガイドの説明もつまらないと言えつまらない。王の遺骸がなかった点に触れて、acid soil (酸性土壌) のせいで骨まで溶けたのではないかとの説が紹介された。(私は根拠もなく、王の遺骸は何かしらの事情があって、ここから別の墓に移されたのではないかと mystery ばかり考えていたが、この酸性土壌説ほど説得力がないと高橋さんに言われた。) しかしここからは最近人骨や馬骨が発見されているのだが、年代が違うのか、それとも土壌の性質も場所や深さによって違うのだろうか。この墳墓地の調査発掘は British Museum の研究員が中心となって今も行われているが、全面的な徹底調査には多額の費用が要るので一気に行えないとのことだった。芝原には木が数本立っており、羊が数匹草を食んでいる。徐々に空模様が怪しくなり遠雷も鳴り出した。

guided tour は1時間あまりで終わり、帰るころには次の一団がやって来た。解散後、柵の外の小道を船墓の前に設けられた見学台 (view platform) まで行き、川側から塚を仰ぐ。ここが船塚の正面と言ってよく、船は舳先をこっちに向けて埋められていた。ああ、これで私にとっていわば巡礼の旅は終わった。長年の念願がかなった。レンタカーで同行してくれた高橋さんのお蔭である。なにごとにも念願成就後の虚脱感というのがあるものだ。これは決して悪いものではない。一種の余韻を味わうことも出来るからだ。次の目的地 Kings Lynn に向かう車の中でこの余韻を味わっていると、草木にとっては待望の heavy shower がやってきた。一つの旅の終わり方としては良いものだ。雨の中、B & Bを高橋さんが見つけてくれた。今晚は嵐の音を聞きながら今日一日の出来事を回想しよう。(2002年7月31日記す。)

(文中、高橋さんとは本学人文学部教授で本新潟大学英文学会代表の高橋正平氏のことである。お名前を挙げて感謝の意を表する次第である。)